

柳澤良一

159	157	155	153	151	149	147	145	143	141
祖業儒林聳	東堂一枝折	射每占正鵠	却尋初營仕	京國歸何日	形馳魂悅悅	俄頃羸身健	山看遙縹綠	強望垣牆外	跛牂重有繫

160	158	156	154	152	150	148	146	144	142
州功吏部銓	南海百城專	烹寧懷小鮮	追計昔鑽堅	故園來幾年	目想涕連連	等閑殘命延	水憶遠潺湲	偷行戶牖前	瘡雀更加攣

144 143 142 141

跛さう 重かまねて繁はじ有り
瘡しょう雀さく 更さらに戀れんを加くはへらる
強かひて垣かき牆やうの外のそを望ぞむ
儉けんかに戸まへ牖ありの前ありを行ありく

160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145
州功	祖業	南海	東堂	烹て	射て	追つて	却つて	故園に	京国	目に	形馳せて	等閑に残る	俄頃	水には	山には
吏部銓	儒林	百城	一枝	寧ろ小鮮を懷はむや	毎に正鵠を占む	計ふ	初めての営仕を尋ね	來らむこと幾ばくの年ぞ	歸らむこと何れの日ぞ	想つて	魂	に	羸身健し	速き潺湲を憶ふ	遥かなる繡緑を看る
る	聳く	にす	折る			昔の鑛堅を				涕連連たり	惓惓たり				

【語釈】

141 ◆跛牂重有繫 Ⅱ我が身は、足の悪い牂羊、その上、つながれていて、全く自由にならない。「跛」（音、ハ）は、あしなえ。片足が不自由で歩行の困難なこと。足を引きずること。跛足。『類聚名義抄』「跛へ布火反、ナヘク、アシナへ、フム、コユ、又音貴、カタシタツ、和ハ」。「牂」（音、サウ）は、牂羊。『爾雅』卷十一・釈畜「羊、牡は牂、牝は牂なり」（羊、牡牂。牂羊。「跛牂」は、足が不自由で足を引きずる牂羊。片足の牂羊。ただし『類聚名義抄』は「牂」を牂羊とする（「牂へ牂羊、メヒツシン」）。『史記』卷八十七「李斯列伝第二十七」に「泰山の高きこと百仞にして、跛牂は其の上に牧ふ。夫れ樓季や、五丈の限りを難しとし、豈に跛牂や、百仞の高さを易しとせむや」（泰山之高百仞、而跛牂牧其上。夫樓季也、而難五丈之限、豈跛牂也、而易百仞之高哉、注「詩に云はく、牂羊墳首。毛伝に曰はく、牝を牂と曰ふ」（詩云、牂羊墳首。毛伝曰、牝曰牂。なお、『和刻本』は「牂」字を「牝」字に作る。「毛詩」卷十五・小雅魚藻「苕之華」所収。『後漢書』卷七十一・孔融伝第六十）に「是れ跛牂をして高岸を闢はむと欲し、天險も得て登るべからしむるなり」（是使跛牂欲闢高岸、天險可得而登上也）。『万葉集』卷五・山上憶良「沈痾自哀文」（沈痾自哀文に「杖に倚りて且に歩まむとすること、足を跛く驢の比し」（倚杖且歩、比跛足之驢）。「牂」字、尊経閣文庫の丙本は誤字（テヘンに羊）の右旁「牂」字に作る、「牝」字を誤るか。『菅家文章』卷九・五九九「藏人頭を罷めむことを請ふ字」（請罷藏人頭狀）に「跛牂をして妄りに仙欄に触れしめ、腐鼠初めて禁省を汙さしめ

勿からまくのみ」（勿俾下跛牂妄触仙欄、腐鼠初汙禁省而已）というように、道真はすでに自身を跛牂に喩えていた。「繫」字、一本「熟」字に作る。「繫」（音、チフ）は、きずな。ほだし。つなぎとめるもの。自由を束縛するもの。『広雅』「繫、絆也。『菅家文章』卷四・二九二「日の長きに苦しむ」（苦日長）に「此の時最も思ふ攸は、烏兔の駐まりて繫るるが如きこと、日長く或は日短き、身騰り或は身繫るる」（此時最攸思、烏兔駐如繫、日長或日短、身騰或身繫）というように、道真は讃岐国守になって四年、望郷と旅愁の念に駆られて苦しみ、「繫る」という言葉を用いている。

142 ◆瘡雀更加繫 Ⅱ我が身の上は、病氣でかさのできた雀、その上手なえになつて飛ぶこともできない。「瘡雀」は、かさのできた雀。「瘡」（音、シャウ）は、かさ。できもの。また、傷。傷あと。『白氏文集』卷十五・〇八〇七「渭村に退居し、礼部の崔侍郎・翰林の銭舍人に寄する詩一百韻」（渭村退居、寄礼部崔侍郎・翰林銭舍人詩一百韻に「尚ほ遺簪の折るるを念ひ、仍ほ病雀の瘡を憐れむ」（尚念遺簪折、仍憐病雀瘡）。「雀」は、平安時代に「スズミ」と呼ばれた。スズミの訓は「雀、スズミ」（『類聚名義抄』「色葉字類抄」とある。「雀」字、底本は誤字の右旁「雀イ」。「繫」（音、レン）は、つる。ひきつる。病氣である。訓は、「繫、手奈戸」（『新撰字鏡』。『文選』卷十九・賦・情・宋玉「登徒子好色の賦、並びに序」（登徒子好色賦、并序）に「其の妻は蓬頭、繫耳、齟齬歴齒、旁行踽偻にして、又疥且つ痔なり」（其妻蓬頭、繫耳、齟齬歴齒、旁行踽偻、又疥且痔）、李善注「爾雅に曰はく、繫は病なり。力専の切」（爾雅曰、繫病也。力專切）。『塩鉄論』卷四「毀学第十八」に

「李斯の荀卿の門に在るに方たつては、闢韋は之と軫を齊しくす。其の翼を奮ひ高く挙げ、龍昇して驥驚し、九を過ぎ二を軋ぎ、万仞に翔翔するに及んでは、鴻鵠華駟且に侶を同じくす。況むや跛牂燕雀の属をや」(方三李斯在荀卿之門、闢韋与之齊軫。及其奮翼高舉、龍昇驥驚、過九軋二、翱翔万仞、鴻鵠華駟且同侶。況跛牂燕雀之属乎)とあり、牂と雀、跛と轆とが対する。

143 ◆強望垣牆外 足の悪い牝羊はつながれて、せめて垣根の外に出たいと願う。「垣牆」は、垣。低い土塙。「札記」卷六「月令第六」に「孟秋の月、…垣牆を壊ぎ、城廓を補ふ(孟秋之月、…坏垣牆、補城廓)。「千字文」「耳を垣牆に属す(属耳垣牆)」。二十卷本『倭名類聚抄』卷十・居処部・牆壁類「垣牆 爾雅に云はく、牆へ音、常へは之を墉(音、唐)と謂ふ。李巡が曰はく、垣へ音、園。和名、賀岐」と謂ふ(垣牆 爾雅云、牆へ音、常へ謂之墉(音、唐)李巡曰謂垣へ音、園。和名、賀岐。「牆」と「牆」は同字)。

144 ◆儉行戸牖前 かのできた雀は手なえになって、こっそり戸口や窓の前をよちよち歩く。道真自身、足疾をわずらい、歩行も不由で、また瘡も出て、手も不自由だったのだらう。しかもこれは彼の宿痾だったとみえ、寛平元年(八八九)、四十五歳の時、菅家文草「卷四・三三五」病ひに依りに閑居す、聊かに所懷を述べて、大学士に寄せ奉る(依病閑居、聊述所懷、奉寄大学士)に「脚の灸は堪ふること無くして州府を去りぬ、頭の瘡は放たずして故人に遇へり」(脚灸無堪州府去、頭瘡不放故人遇の句がある。「儉」(音、トウ)は、かりそめ。しばらく。一時の。こっそり。「類聚名義抄」「儉へヌスミ、ヌスム、ヌスミニ、ヒソカニ、ウスシ、

イヤシ、シバラクモ、イヤシクモ、カハル)。「戸牖」は、入口の戸と横窓。入口。両扉あるものを門といい、一枚の戸(半門)だけのものを戸、すなわち入口という。室(部屋)には、戸(入口)と牖(壁に穴をあけ、木を交差させて作った窓)とがある。「老子」上「無用第十二」に「戸牖を鑿ちて以て室を爲る、其の無に当つて室の用有り(鑿戸牖以爲室、当其無有室之用)。「淮南子」卷七「精神訓」に「夫れ孔竅は精神の戸牖にして、氣志は五藏の使候なり」(夫孔竅者精神之戸牖也、而氣志者五藏之使候也)。「新撰朗詠集」卷上・秋歌三十六首・一二二「戸牖荒涼として蓬草乱る、秋毎に鎖に待つ雁尽くること遅し」(戸牖荒涼蓬草乱、毎秋鎖待雁尽遲)。二十卷本『倭名類聚抄』卷十・居処部・牆壁具「牖 説文に云はく、牖へ与久の反。字片戸甫に從ふなり。和名、末度」は壁を穿ち木を以て交を爲す窓なり」(牖 説文云、牖へ与久反。字從片戸甫也。和名、末度)穿壁以木爲交窓也。『倭名類聚抄』卷十・居処部・門戸類「戸 野王案するに城郭に在るを門と曰ひ、屋堂に在るを戸と曰ふ」(戸 野王案在城郭曰門、在屋堂曰戸)。「窓 説文に云はく、屋に在るを窓へ楚江の反。字亦た牕に作る。和名、末止」と曰ふ。牆に在るを牖へ已に牆壁の具に見えたり」と曰ふ。兼名苑に云はく、一名は牖(音、籠)。「窓 説文云、在屋曰窓 楚江反。字亦作牕。和名、末止。在牆曰牖へ已見牆壁具」。兼名苑云、一名牖(音、籠)。盛唐・祖詠「蘇氏の別業」(蘇氏別業)に「南山戸牖に当たり、澧水園林に映ず」(南山当戸牖、澧水映園林)。

145 ◆山看遥縹緑 縹緑は、はなだ色(薄い藍色)と緑色。北に

四王寺山脈、東に高雄山、南に天拝山（天判山）が近くにそびえる。
『説文』「縹は、帛の白青色なるものなり」（縹、帛白青色也）、解字
注に「礼記正義に、之を碧と謂ふ」（礼記正義謂之碧）。『新撰字
鏡』「縹へ：縹也。波奈太」。『類聚名義抄』「縹（アヲシ、ハナダ）
」色葉字類抄』「縹へハナタ、青黄色也」総（同）、「緑へミトリ、
力玉反。青黄色也」翠へ同、七酢反。碧へ同、彼役反」。

146◆水憶遠潺湲Ⅱ「潺湲」は、さらさらと流れる水の音の形容。「セ
ンクワン」と読まれることが多いが、「湲」は韻字（下平声一先韻）
なので、こゝは、「センエン」と読むのがよい。『楚辞』卷二・九歌
「湘夫人」に「荒忽として遠く望み、流水の潺湲たるを観る」（荒
忽兮遠望、觀流水兮潺湲）。盛唐・王維「輞川閑居 裴秀才迪に
贈る」（輞川閑居、贈裴秀才迪）に「寒山転た蒼翠、秋水日に潺
湲」（寒山転蒼翠、秋水日潺湲）。北に柴川（御笠川の源流）、西南
に白川が流れる。『日本紀私記（丙本）』応神天皇「潺湲へ曾々岐奈
加流」。『菅家後集』四七〇番「瑠璃地上水潺湲」参照。「湲」字、
底本「侵」の右旁「湲」。

147◆俄頃羸身健Ⅱ「俄頃」は、にわかに。たちまち。また、しばらく
くして。『俄刻』「頃刻」ともいう。『広韻』「俄、俄頃、速也」。『助
字弁略』「頃：俄頃、少間也」。『類聚名義抄』「斯頃へシバラク、
何頃へ同、少頃へ同、俄頃へ同」。『色葉字類抄』「且へシハラク、
：俄頃へ同」。『文選』卷十一・賦・江海・郭璞「江の賦一首」（江
賦一首）に「數百に倏忽として、俄頃に千里たり」（倏忽數百、
千里俄頃）。盛唐・杜甫「茅屋秋風の破る所と為る歌」（茅屋為
秋風所破歌）に「俄頃にして風は定まり雲は墨色、秋天漠漠とし

て昏黒に向かふ」（俄頃風定雲墨色、秋天漠漠向昏黒）。『遊仙窟』
「俄頃とししばらくある中間に、數廻相接はる」（俄頃中間、數廻相
接）。『白氏文集』卷六・〇二四六「婦田三首（三）」に「孰か能く
俄頃の間も、心を待ちて榮辱に繋かれむ」（孰能俄頃間、將心繫
榮辱）は、白詩の一例。『経国集』卷十・梵門・小野岑守「五言、
婦休独臥し、高雄寿空上人に寄す、一首」（五言、婦休独臥寄高雄
寿空上人一首）に「空色と有無と、俄頃にして復た忽たり」（空色
將有無、俄頃復忽矣）。『羸身』は、瘦せ疲れた身体。『羸』（音、
ルイ）は、瘦せる。疲れる。弱る。『説文』「羸は、瘦せるなり」（羸、
瘦也）。『類聚名義抄』「羸へツカル、ヤス、クフヒ、カツ、アラハ
ル、マク、ヨハシ、オトル」。『健』は、すこやか。たけし。強い。
『類聚名義抄』「健へコハシ、スクヨカナリ、ツヨシ、タケシ」。

148◆等閑殘命延Ⅱ特に意を用いないのに、死にそうなる命を生き延び
る。「等閑」は、ありふれたこととして氣にとめない。なおざりに
する。かりそめに。無事。場当たりしだいに。唐代の俗語。『助字
弁略』卷三「等」に「等閑は、猶ほ尋常と云ふがごとし、輕易の辞
なり」（等閑、猶云尋常、輕易之辞也）。『詩詞曲語辭匯釈』卷四
「等閑」に「等閑は、猶ほ平常なり、隨便なり、端無きなりと云ふ
がごとし」（等閑、猶云平常也、隨便也、無端也）。塩見邦彦氏
『唐詩口語の研究』「等閑」に「六朝詩には一例も檢索することはで
きないが、唐詩では頻出する俗語である。：『敦煌變文集』では「閑」
は「閑」となっているが、あるいは「等閑」の方が古い形なのかも
しれない。『白氏文集』卷十二・〇六〇二「琵琶引」（琵琶引）に
「今年の歔笑復た明年、秋の月春の風等閑に度る」（今年歔笑復明

年、秋月春風等閑度。」「殘命」は、残り少ない命。余命。」「等閑」、貞享版本「等間」に作る。

149 ◆形骸魂悦Ⅱ身(肉体)が馳せると、魂もとどまることなく、ふらふらと浮かれ出てしまう。身も心も恍惚状態になること。「形」は、形骸。身、すなわち肉体のこと。「形神」というように、「神」(精神)と対比して言うことが多い。「列子」仲尼第四・第五章に「顧みて子列子を視るに、形神相偶せず、与に群すべからず」(顧視子列子、形神不相偶、而不_レ可_レ与群)。「文選」卷一・賦・京都・班固「兩都の賦二首」(二)東都の賦一首「兩都賦二首」(二)東都賦一首に「形神寂寞として、耳目當まず」(形神寂寞、耳目弗_レ當、李善注「淮南子に曰はく、又曰はく、形は生の舍なり。神は生の制なり」(淮南子曰、又曰、形者生之舍也。神者生之制也)。「荅家文章」卷六・四六六「傍水行」に「此の時樂地程里無し、形神を鞭_レ轡_レして独り往き還る」(此時樂地無_レ程里、鞭_レ轡_レ形神 独往還)は、その一例。なお、「淮南子」「精神訓」によると、人は天地の氣を稟_レけて生まれるが、精神は天から受けたもの、肉体は地から稟_レけたものであるという。また、「主術訓」によると、天の氣である魂が精神となり、地の氣である魄が形骸(肉体)となるという。つまり、魂は、人の精神をつかさどる氣であり、魄は、人の形骸をつかさどる氣であるという。道真にはかつて、高岳五常に対策を課したときの問題文「魂魄を徵_レせ」(「徵魂魄」。「荅家文章」卷八・五五九)がある。「悦悦」(キヤウキヤウ、またはクワウクワウ)は、「恍恍」に同じ。恍惚状態になること。茫然自失のさま。氣抜けしてばんやりしているさま。ここは、身体の精氣たる魄がともすれば

都に引かれて、思いを馳せる意。「悦」は、うつとりすること。氣抜けすること。「老子」第二十一章に「道の物為る、惟れ悦、惟れ惚。惚たり悦たり、其の中に象有り。悦たり惚たり、其の中に物有り」(道之為_レ物、惟悦、惟惚。惚兮悦兮、其中_レ有_レ象。悦兮惚兮、其中_レ有_レ物)。「文選」卷一・賦・京都・班固「兩都の賦」(兩都賦の「西都の賦」(西都賦)に「魂悦悦として以て度を失ひ、迴塗を巡りて下低す」(魂悦悦以失_レ度、巡迴塗而下低、李善注「長門賦に曰はく、神悦悦として外に淫ぶ。王逸が楚辭の注に曰はく、悦は意を失ふなり」(長門賦曰、神悦悦而外淫。王逸楚辭注曰、悦失意也、和刻本「文選」に「悦悦」を「悦悦トホレテ」と訓む。「白氏文集」卷七・〇三〇六「香鑪峯の頂に登る」(登_レ香鑪峯頂)に「上りて峯の頂に到れば、目眩めき神悦悦たり」(上_レ到峯之頂、目眩神悦悦)。「類聚名義抄」「悦ヘクルフ、オソル、ホレタリ、悦々・トホル」。

150 ◆目想涕連連Ⅱまぶたを閉じれば、都のことが思い出されて涙がとめどなく溢れ出てくる。「目想」は、目に浮かべる。目に思い描く。「想」の訓「おもひはかつて」は、底本の傍訓「オモハカテ」に拠る。「文選」序「歴く文囿を觀、泛く辞林を覽るに、未だ嘗て心に遊び目に想ひ、晷を移して倦むを忘れずんばあらず」(歴觀_レ文囿、泛覽_レ辞林、未_レ嘗_レ不_レ心遊目想、移晷忘_レ倦)。「文選」卷十六・賦・哀傷・潘岳「寡婦の賦一首」(寡婦賦一首)に「窈窕に潜み翳れ、心に存して目に想ふ」(窈窕兮潜翳、心存兮目想)。「白氏文集」卷七・〇三〇六「香鑪峯の頂に登る」(登_レ香鑪峯頂)に「迢迢たる香鑪峯、心に存し耳目に想ふ」(迢迢香鑪峯、心存耳目想)。「涕」

(音、テイ)は、涙。二十卷本『倭名類聚抄』卷三・形体部・耳目類「涕淚へ承泣附」説文に云はく、涕淚へ体類の二反。和名、奈美太へは目の汁なり。黄帝内経に云はく、目下之を承泣へ急の反。和名、奈美太々利」と謂ふ(「涕淚へ承泣附」説文云、涕淚へ体類二反。和名、奈美太へ目汁也。黄帝内経云、目下謂之承泣へ急反。和名、奈美太々利)。「連連」、貞享版本「連連」に作る。ここは、版本の「連連」に作る本文がよい。「連連」は、うち連なるさま。遠く連なり続くさま。魏・陳琳「飲馬長城窟行」に「長城何ぞ連連たる、連連として三千里」(長城何連連、連連三千里)。「連連」は、さめざめと泣くさま。涙の流れれるさま。「毛詩」卷三・国風・衛風「氓」に「復関を見ざれば、泣涕連連、既に復関を見るときに、載ち笑ひ載ち言ふ」(不見復関、泣涕連連、既見復関、載笑載言)。「遊仙窟」にも見える)。「戦国策」「斉策四」に「管燕、連然として涕を流して曰はく、『悲しい夫、士何ぞ其れ得易くして用る難きや』と」(管燕連然流涕曰、悲夫、士何其易得而難用也、鮑彪注「連と連と同じ、泣下るなり」(連与連同、泣下也)。「文選」卷二十三・詩・贈答・王粲「蔡子篤に贈る詩一首」(贈蔡子篤詩一首)に「中心孔だ悼み、涕淚連而たり」(中心孔悼、涕淚連而、李善注「周易に曰はく、泣血連如たり」(周易曰、泣血連如)。「白氏文集」卷五十二・三六九「晨興に和し、因つて亀児を問ふに報ゆ」(和「晨興」、因報問「亀児」)に「未だ吟ぜざるに先づ涕垂る、茲の連如の際に因りて、一たび心中の悲しみを吐く」(未吟先涕垂、因茲連如際、一吐心中悲)。「新撰万葉集」卷上・夏歌廿一首・五〇「好女心に係て夜眠らず、終霄臥起して涙連連なり」(好女係

心夜不眠、終霄臥起涙連連)。

151 ◆京国帰何日 京国は、朝廷。また、ふるさとの国。ここは、京の都のこと。「文選」卷五十六・誄上・曹植「王仲宣の誄」(王仲宣誄)に「我が公は実に嘉し、京国に表揚す」(我公実嘉、表揚京国)。「白氏文集」卷十七・一〇八四「春、琵琶を聴き、兼ねて長孫司戸に簡す」(春聴琵琶、兼簡長孫司戸)に「都尉の京国を思ふを言ふが如く、明妃の虜庭を厭ふを訴ふるに似たり」(如言三都尉思京国、似訴明妃厭虜庭)は、白詩の一例。「帰何日」は、京の都に帰る日はいつになるのか、という切なる思いを言う。「菅家後集」四八〇「旅の雁を聞く」(聞旅雁)の「帰り去る日」(帰去日)参照。道真が挾つたと思われる「白氏文集」卷十六・九〇八「東南行一百韻」に「帰らむことを憶ひて恒に慘憺、旧を懷ひて忽ち踟躕」(憶帰恒慘憺、懷旧忽踟躕)、中唐・元稹・二八七「楽天の東南行詩一百韻に酬ゆ」(酬楽天東南行詩一百韻)に「国を望みて雲に參る樹、家に歸りて地に滿つる燕」(望国參雲樹、帰家滿地燕)とある。

152 ◆故園来幾年 故園は、旧苑。また、故郷。「白氏文集」卷六十二・三〇〇二「寒食」に「我故園に歸りてより来た、九度寒食に逢ふ、故園何れの処にか在る、池館東城の側」(我帰故園来九度逢寒食、故園在何処、池館東城側)は、白詩の一例。ここは、東の京、宣風坊にある菅原氏邸内の庭園。「菅家文草」卷四・二九三「端午の日、艾人を賦す」(端午日賦艾人)に「時有りて戸に当たりて身を危ぶめて立てり、意無し故園に脚に信せて行くに」(有時當戸危身立、無意故園信脚行)。「和漢朗詠集」卷

上・夏・端午・一五六。「来幾年」は、京の都からやって来てから幾年になるだろうか。『白氏文集』卷三・諷諭・〇一三三「新豊の折臂翁」（新豊折臂翁）に「翁に問ふ臂折れしより来のかた幾年ぞ、兼ねて問ふ折るを致せしは何の因縁ぞ」と（問ふ翁臂折来幾年、兼問致折何因縁）。

153 ◆却尋初営仕Ⅱ（宣風坊の菅家廊下の思い出に引かれて）、思いがけず、京の自宅につながる自分の半生の経歴を回想する。「却」は、思いがけず、無意識のうちに。意外さを表す唐代の俗語。「却」の訓「かはつて」は、底本の傍訓「カハテ」に拠る。『白氏文集』卷十四・〇七〇八「重ねて杏園を尋ぬ」（重尋杏園）に「忽と憶ふ芳時頻りに酩酊せしことを、却つて酩酊を尋ねて重ねて徘徊す」忽憶芳時頻酩酊、却尋酩酊重徘徊。「初営仕」は、初めて官途についた頃のこと。「営仕」は、不審。平仄の点から、「営仕」（平仄）よりも、同じ意味と思われる「出仕」（仄仄。官に仕えること）とあるほうがよい。「営」に特別の意味をこめ、単に初出仕をいうのではなく、出仕した上で営営とその仕事に休まず努力したことを言うために使用したか。存疑。道真は、貞観九年（八六七）一月七日、二十三歳の時に文章得業生となり、二月二十九日に正六位下を受けられ、下野権少掾に任じられている。

154 ◆追計昔鑽堅Ⅱ「鑽堅」は、堅いものを切る。転じて、深く学問すること。また、学徳などを仰ぎ慕うこと。顔淵が孔子をほめたたえた『論語』の故事に基づく。『論語』卷五「子罕第九」に「顔淵喟然として歎じて曰はく、之を仰げば弥いよ高く、之を鑽れば弥いよ堅し」（顔淵喟然歎曰、仰之弥高、鑽之弥堅。ここは、道真が

若いとき深く義理を研究し、節操をみがいたこと、儒者としての道を修業したことをいう。貞観十二年（八七〇）九月十一日の叙位では、対策に「中の上」の成績で及第した道真に対し、一階を加えて正六位上に加叙していて、道真がますます深く学問に努めていたことが知られる。また、『菅家文章』卷四・二九二「日の長きに苦しむ」（苦日長）に「少き日秀才為りしとき、光陰常に給らず、朋交言笑を絶ち、妻子親習を廃す」（少日為秀才、光陰常不給、朋交絶言笑、妻子廢親習）と、寸暇を惜しんで勉学に励んだ様子が詠まれている。「鑽」（音、サン）は、掘る。うがつ。穴をあける。『新撰字鏡』「鑽へ比支々留、字加豆」。『晋書』卷九十一・儒林伝第六十一・虞喜伝に「堅を鑽り微を研ぎ、及ばざるの勤有り」（鑽堅研微、有弗及之勤）。『菅家文章』卷五・三六八「宰相に拝せらる、藤納言が鄭州の玉帯を賜へるを謝し奉る」（被拜宰相、奉謝藤納言賜鄭州玉帯）に「為に彫りたる文に向かひて相報げて道ふ、鑽堅の功臣誰にか催さる」と（為向彫文相報道、鑽堅功臣被誰催）。

155 ◆射毎占正鵠Ⅱ「正鵠」は、弓のまと。ことの要点。「正」も「鵠」も、鳥の名。一説、正は、布で作った的、鵠は皮で作った的。布製の的の中心に「正」字を置き、實射に用い、皮製の的に「鵠」字を置き、大射に用いる。射の道は君子の道に似ているとされ、もし正鵠に当て損じたなら、その原因は自分の中にあるとされ、君子の道もまた、自分の身を反省して欠点を改めるべきであるとされる。君子の道を射になぞらえることは、『論語』卷二「八佾第三」に「子曰はく、君子は争ふ所無し。必ずや射か。揖譲して升下し、而う

して飲ましむ。其の争ひや君子なり」(子曰、君子無所_レ争。必也射乎。揖讓而升下、而飲。其争也君子)、また、『中庸』第三段・第一小段・第三節(朱子章句第十四章)に「子曰はく、『射は君子に似たること有り。諸を正鵠に失すれば、諸を其の身に反求す』と」(子曰、射有_レ似_二乎君子_一。失諸正鵠、反求諸其身。『藝文類聚』卷七十四・巧藝部・射「礼記曰、…」と見える。大系本補注で、川口久雄先生は、「前田家本菅家伝に「策を射て鵠に中つるの微なり」とみえるように、ここは直接には対策及第する意で五〇の末句に照応する。菅家伝や北野天神縁起における都良香邸の弓術を競う説話はこの句にもとづいて、後世組織し直された伝説で、仏伝における悉達太子の弓術を競う説話が投影したもの。以下二句(155・156句)は、君子として、政治家として、儒家の立場を誤らなかつたことをいう。」と言われる。ここは、省試を受験することを「射鵠」といい、対策に及第することを「正鵠を射る」という。『菅家文章』卷一・五〇「王大夫の対策及第を賀する作に和し奉る。へ韻を次ぐ」(奉_レ和王大夫賀_二対策及第之作_一。へ次韻)の尾聯に「道ふこと莫_レ成功能_レ管領すと、一枝の蠹桂家君に謝す」(莫_レ道成功能_レ管領、一枝蠹桂謝_二家君_一)。『本朝文粹』卷九・詩序二・論文・紀在昌「北堂漢書の竟宴に史を詠じ蘇武を得たり」(北堂漢書竟宴詠_レ史得_二蘇武_一)に「学士射鵠の業跡を累ね、鵬龍の才性を陶す」(学士射鵠之業累跡、鵬龍之才陶_レ性)。なお、都良香邸で弓術を競う説話とは、道真二十六歳の時に、師の都良香の邸において弓射を試みたところ、道真の武技が優れていて、的にすべて当たり、皆驚嘆したという話である。

156◆烹_二寧懷小鮮_一「小鮮」は、小さい魚。こざかな。『老子』「居位第六十」に「_レ天_レ國を治むるには、小鮮を烹るが若くす。道を以て天下に莅めば、其の鬼も神ならず」(治_二天_レ國_一若_二烹_二小鮮_一。以_二道莅_二天下_一、其鬼不_レ神)とあり、小魚を煮る場合、急いで火を強くしたり、かきまわしたりすると、小魚はその肉がくずれて形を失い、味を損する。それゆえ、箸であちこちつままわさないようにするが、政治を行う場合にも、それと同じように、政治家は些少なことをつづくようなことは避けるべきだということ。国を治めるのに人為を用いすぎるとよく治まらないので、無為の政治をするべきだということ。『莊子』外篇「在宥第十一」に「故に君子已むを得ずして、天下に臨莅すれば、無為に若くは莫し」(故_二君子不_レ得_レ已_一、而臨莅_二天下_一、莫_レ若_二無為_一)。『淮南子』卷十一「齊俗訓」に「老子曰はく、大國を治むるは小鮮を烹るが若しと。寛裕を為す者は曰はく、数しば撓すこと勿かれと。刻削を為す者は曰はく、其の醎酸を致すのみと」(老子曰、治_二大國_一若_二烹_二小鮮_一。為_二寛裕_一者曰、勿_二数撓_一。為_二刻削_一者曰、致_二其醎酸_一而已矣と、老子の言葉の解釈が示してある。すなわち老子の言葉を解釈して、寛容の政治を行う者と、酷薄の政治を行う者との解釈が示され、前者は、たびたびかきまわすことのない放任の政治を行い、後者は塩味か酸味で味付けをするような為政者の意のままに従わせる政治を行うことと解釈するとしている。道真はもちろん、前者の寛容の政治をしたということを述べようとしていたのであろう。『菅家文章』卷四・二六二「丙午の歳、四月七日、予初めて境に莅み、州の府を巡視せり。…」(丙午之歳、四月七日、予初莅_二境_一、巡_二視州府_一。…)に「魂迷

ひて轡を案ずれば羸れたる馬顛れぬ、手拙くして薪を揚ぐれば小鮮爛れたり」(魂迷案轡顛羸馬、手拙揚薪爛小鮮)。「本朝文粹」巻六・奏状中・申官爵(付申執政人)・一五一・菅三品(菅原文時)「殊に天恩を蒙りて山城守に遷し近江權守(介)に兼任せられむことを請ふ状」(請殊蒙天恩被遷山城守兼任近江權守(介)状)に「右道風、謹んで近代拝除の例を検するに、当寮の頭より、四品の官爵に登る者、年暦を改めず、一国の烹鮮に預る」(右道風、謹検近代拝除之例、自当寮頭、登四品之官爵者、不改年暦、預二国之烹鮮焉)。「札記」巻十二「内則」に「冬は鮮羽に宜しく、膏羶を膳にす」(冬宜鮮羽、膳膏羶)、注に「鮮は生魚なり。羽は雁なり」(鮮生魚也。羽雁也)。「職原鈔」下「諸国」に「凡そ国司の撰、和漢之を重んず、此を烹鮮の職と云ふ。又分憂の官と云ふ」(凡国司之撰、和漢重之、此云烹鮮之職。又二分憂之官)。「烹鮮」は、国政を処理すること。後世の偽書「菅家遺誠」に「神風の奥は格に合ふ吏幹の刺史を撰びて、甲乙左右の民役無く、烹鮮省槐の愛を専らにす」(神風之奥撰合格吏幹之刺史、無甲乙左右之民役、専烹鮮省槐之愛)。「懷」字、貞享版本「壞」字に作る。

157◆東堂一枝折Ⅱ「東堂」は、晋の宮殿の東方の堂で、試験場のこと。官吏登用試験に及第して、進士(文章生)や秀才(文章得業生)となることを「月の桂を折る」という。晋の卻詵の故事に拠る。卻詵は武帝の泰始年中(二六五年―二七四年)に对策及第した。雍州刺史に任命され赴任する時、武帝が東堂で見送られた。その時、卻詵は、「臣は賢良に挙げられ、対策して天下第一と為れるも、猶ほ

桂林の一枝、崑山の片玉のごとし」(臣等賢良、対策為天下第一。猶桂林之一枝、崑山之片玉)と謙遜した(『晋書』巻五十二・列伝二十二「卻詵伝」)。道真が天安三年(八五九)貞観元、十五歳で元服した時、母が詠んだ歌に、「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」(拾遺和歌集)巻八・雜上・四七三。詞書「菅原の大臣、かうぶりし侍りける夜、母の詠み侍りける」とある。道真は、貞観十二年(八七〇)、二十六歳のとき文章得業生方略試を受験し、対策及第した。このことを指して、「(桂の)一枝を折る」というのである。方略策の答案は、『菅家文章』巻八・対策・五六六、五六七に見える。『菅家文章』巻四・二六四「文進士が新たに及第して、老母を拝辞して、旧師を尋ね訪ひしことを謝す」(謝文進士新及第、拝辞老母、尋訪旧師)に「春月辞びず高く桂を折ることを、秋風力有り遠く雲を披くに」(春月不辭高折桂、秋風有レ力遠披雲)。

158◆南海百城專Ⅱ讃岐守となつて任地に下り、讃州の多くの町や村を治めた。「南海」は、南海道で、ここはそのうちの讃岐国を指す。道真は、仁和二年(八八六)四十二歳、讃岐国司赴任が決まって以来、讃岐のことを「南海」と言うことが多い。『菅家文章』巻三・一九〇「故人の書を得て、詩を以て之に答ふ」(得故人書、以詩答之)に「身を寄する南海為ることを苦しむと雖も、歩びを投せば猶ほ安らかに北堂を省みる」(寄身雖苦為南海、投歩猶安省北堂)は、その一例(他に、『菅家文章』巻三・一八四、一八七、一九八、二二二、巻四・二六四、二六五、二七九)。「百城を専らにす」とは、(書万巻を座右に置くかわりに)「百城を治めた、の

意。『專城』は、一城の權を専らにすることで、地方長官(国司)となること。『文選』卷五十七・誄・潘岳「馬汧督の誄一首」に「蓋し十を以て數へ、符を割き城を専らにする」(蓋以十數、剖符專城)、李善注「古樂府の『日出東南隅』に曰はく、『三十にして侍中郎、四十にして城を専らにして居り』」(古樂府日出東南隅曰、三十侍中郎、四十專城居。『拾芥抄』中本・第三官位唐名部・唐名大略)に「受領へ…專城…」。『白氏文集』卷十七・一〇九三「初めて刺史の緋を著け、友人の贈られしに答ふ」(初著刺史緋、答友人見贈)に「故人安慰して善く辭を為す、五十にして城を専らにするは道未だ遅からずと」(故人安慰善為辭、五十專城道未遲は、白詩の一例。道真は、讃岐守に任じたことを「專城」という。

『菅家文章』卷四・二九二「日の長きに苦しむ」(苦日長)に「忽ちに專城の任を忝くして、空しく為に中路に泣く」(忽忝專城任、空為中路泣)。

159 ◆祖業儒林簞 Ⅱ私は、父祖以来の學問を受け継いで、儒家の人々の間に高くそそり立っている。前前句(157句)をうける。『祖業』は、祖先が開き、残し伝えた事業。先祖の功業。『文選』卷三十七・表上・孔融「彌衡を薦むる表一首」(薦彌衡表一首)に「昔世宗統を継ぎ、將に祖業を弘めむとす」(昔世宗繼統、將弘祖業)、李善注「班固が漢書紀述に曰はく、世宗雖暉、思弘祖業」。『漢書』卷六十四・嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈伝第三十四下「終軍伝」に「必ず明聖の潤色を待ち、祖業無窮に伝はる」(必待明聖潤色、祖業伝於無窮)。『政事要略』卷三十・年中行事「御画事(へ附阿衡事)」の

仁和四年(八八八)「昭宣公(藤原基経)に奉る書」(奉昭宣公書)に「声価亦たも世人に嚇すに祖業を以てす」(声価亦嚇世人以祖業)。なお、道真は、地方官として南海の讃岐国に赴任すること(分憂)にされたことが、左遷人事と噂する者もいて、「祖業」である儒者としてのプライドを著しく傷つけられたと認識していた。

『菅家文章』卷三・一八七「北堂の饞の宴、各おの一字を分かつ」北堂饞宴、各分一字)に「我は將に南海に風煙に飽らむ、更に妬む他人の左遷なりと道はむことを、情つら憶ふ分憂は祖よりの業に非ぬことを、徘徊す孔聖廟門の前」(我將南海飽風煙、更妬他人道左遷、情憶分憂非祖業、徘徊孔聖廟門前)。大宰府に左遷されたことも同じく、道真のプライドを大いに傷つけたに違いない。

道真が「祖業」と言う儒門(學問の家)になったのは、実はそう古いことではなく、曾祖父の土師宿禰古人からで、土師を改めて菅原の姓とすることを願ひ出て認められ、土師器造りから儒門に転身している(『続日本紀』桓武天皇・天応元年(七八二)六月二十五日条)。「儒林」は、儒學者の仲間。儒學者の社會。「史記」卷一三〇「太史公自序」に「孔子卒して自り、京師庠序を崇ぶ莫く、唯だ建元・元狩の間のみ、文辭繁如たり。儒林列伝を作る」(自孔子卒、京師莫崇庠序、唯建元元狩之間、文辭繁如也。作儒林列伝)。「菅家文章」卷二・二二〇「予、詩情怨を作りたる後、…」(予作詩情怨之後、…)に「家業年租本詩を課す」(家業年租本課詩。口訳「我が家は先祖代々、年々の租税のごとく作詩を業としてきた」)。「菅家文章」卷四・二四三「駅樓の壁に題す」(題駅樓壁)に「讃州刺史本詩人」(讃州刺史本詩人。口訳「讃岐守菅原道

真という人は、もともと地方官吏などではなく、詩人である。『菅家文章』巻十・六二九「右大臣の職を辞する第一表」(辞「右大臣職第一表」)に「臣が地は貴種に非ず、家は是れ儒林」(臣地非貴種、家は儒林)。『菅家後集』四六九前「醍醐天皇「右丞相の家」の集を献るを見る」(見右丞相献家集)に「門風は古より是れ儒林、今日の文華は皆、尽くに金なり」(門風自是は儒林、今日文華皆尽金)。貞享版本『菅家後集』奏状・六七四「家集を献る状」(献家集状)に「臣伏して惟るに臣が家儒林文苑為ること尚し。臣が位三品に登り、官丞相に至る、豈に父祖が余慶の延き及ぶ所に非ずや」(臣伏惟臣家為儒林文苑尚矣。臣之位登三品、官至丞相、豈非父祖余慶之所延及乎)。このほかにも、道真が自らを「儒林」の一員であると認識していたことは、『菅家文章』巻一・七六「海上の月夜」(海上月夜)に「若し往来して勝境を憐れはしめましかば、越州買ふこと得なまし」一の儒家を「(若放往来憐勝境、越州買得一儒家)、『菅家文章』巻二・二二五「白菊の花に題す」(題「白菊花」)に「寒き叢養ふこと得たり小さき儒家、雨過ぎて白き沙に垂るるを見るに宜し」(寒叢養得小儒家、過雨宜看垂白沙)、『菅家後集』四七七「楽天が北窓三友といふ詩を詠む」(詠「楽天北窓三友詩」)に「彼は是れ微禽我れは儒者、而るを我れは彼が慈多きに如かず」(彼は微禽我儒者、而我不如彼多慈)等、多数見える。『聳』(音、シヨウ)は、そびえる。高く立つ。そそり立つ。『新撰字鏡』「聳へ曾比介」。『類聚名義抄』「聳へソビク、タカシ、タナビク、…」。

160 ◆功吏部銓 讃州刺史(国守)として在任四年、功績をあげた

ことは吏部省、即ち式部省の役人もよく調べて知っている。道真は、讃岐国守の任期が残り一年を切った、前年の五月、端午の日に、私はどんなことがあっても秩満(任期一杯)まで立派に務めを果たし、名を汚すことは潔しとしないと言っていた(『菅家文章』巻四・二九三「端午の日、文人を賦す」(端午日賦文人)に「縦ひ筋骨を焚くとも名を焚かじ」(縦焚筋骨不焚名)。また、名声とともに、絶えず任期中の功績についても気にかけていた。『菅家文章』巻三・二一九「行春詞」に「政拙きに縁りて声名の墜つるなるべし、豈に敢へて功成り善最に昇らめや」(応「縁政拙声名墜」、豈敢功成善最昇。『菅家文章』巻四・二九一「予、曾經、群臣の花鳥共に春に逢ふといふことを賦すと聞くの詩を以て、前濃州田別駕に寄せ上れり。…」(予曾經以聞群臣賦花鳥共逢春之詩上、寄上前濃州田別駕。…))に「努力明くる春友を求めて到りなば、一枝の巢は旧の丘園に在らむ」(努力明くる春友を求めて到りなば、一枝の巢は旧の丘園に在らむ)(努力明春求友到、一枝巢在旧丘園)、自注「…余れ此の冬秩満つ。功過知り難し、故に云ふ」(…余此冬秩満。功過難知、故云。『菅家文章』巻四・二九六「納涼の小宴」(納涼小宴)に「此の時何悶事、官満未成功」(此時何悶事、官満未成功)。「(此時何悶事、官満未成功)」。『菅家文章』巻四・三二八「九日宴に侍りて、同じく仙潭の菊といふことを賦す。各おの一字を分かつ、製に応ず」(九日侍宴、同賦仙潭菊。各分一字、應製)に「賜嘉一束寿千歳、還りて愧づらくは功無くして天の祉を降さむことを」(賜嘉一束寿千歳、還愧無功天降祉)。このように、道真は、讃岐国守の任期を終えるにあたり、「功」の有無をたいへん気にかけていた。このことはまた後に、寛平九年(八九

七) 七月三日、宇多天皇が三十一歳で皇太子敦仁親王(醍醐天皇)に譲位するにあたって、道真のことを「忠臣」であり「新君の功臣」であると言い、新君(醍醐天皇)に「人の功は忘るべからず」と訓誡していることと重なる(「寛平御遺誡」「右大将菅原朝臣、是鴻儒也。：惣而言之、菅原朝臣非朕之忠臣、新君之功臣乎。人功不可忘。新君慎之云々」)。「州功」は、州を治めた功績。「州」は、国。ここでは讃州、すなわち讃岐国。『類聚名義抄』『州ヘクニ』。

「吏部」は、式部省の唐名。『拾芥抄』中本「第三官位唐名部」に「式部卿ヘ式部省、李部省、天官(周礼)、吏部尚書、大常卿、李部大尚卿」。「運歩色葉集」「李部 リホウ 式部唐名」。「銓」(音、セン)は、はかり。はかる。はかりえらぶ。『類聚名義抄』「銓ヘハカリ、ハカル、サトル、カラハカリ、アキラカニ、アラハナリ」。「銓衡」(人物・才能などをはかり調べること)の意。式部省は、礼式、及び文官の名帳、考課(職務の勤惰、品行の良否を取り調べて、太政官に上申すること)、選叙(官を授け位を叙す)、及び校定勲績、論考封賞等を掌り、大学寮を支配する(『令』巻二「職員令第二」)。

「令」巻五「考課令第十四」に「人物を銓衡し、才能を擢んで尽くせば、式部の最と為よ」(銓衡人物、擢尽才能、為式部の最)。前前句(158句)をうける。讃岐より秩満ちて帰京して、道真は寛平三年(八九二)三月九日、式部少輔に任ぜられ、翌四年に二階級特進して従四位下の参議に、その三年後の七年十月二十六日には、五十一歳で実に四階級昇進して従三位中納言に躍進している。道真が拠ったと思われる中唐・元稹・二八七「楽天の東南行詩一百韻に酬ゆ」(酬楽天東南行詩一百韻)に「科試す詮衡の局、衡参す典校

の厨」(科試詮衡局、衡参典校厨)。

【大意】

- 141 ここでの私の生活は、牝羊が足が悪い上に、逃げ出さぬよう
つながれているようなもので、私に自由は全くなく、
- 142 また、病気でかさのできた雀が、その上に手なえになつて飛ぶ
こともできないようなもので、どこに行くこともできない。
- 143 つながれた足の悪い牝羊は、せめて垣根の外に出たいと願ひ、
144 手なえとなつてかさのできた雀は、せいぜいこっそりと戸口や
窓辺をよちよち歩くだけだ。
- 145 周辺の山水を見わたすと、山はすっかりみどりになった様子が
眺められ、
- 146 遠くからさらさらと音を立てて流れてくる川のせせらぎを聞い
ては、川の様子に思いを馳せる。
- 147 山水にこうして気を紛らわしていると、痩せて疲れた身もたち
まち回復して元気になり、
- 148 深く気にもとめなかった我が生命もまた、寿命が延びたような
気持ちになる。
- 149 しかし、なつかしい都のことを思えば、身も心も、狂おしいほ
どの恍惚状態となり、
- 150 まぶたを閉じれば、都のことが思い出されて涙がとめどなく溢
れ出てくる。
- 151 京の都に帰ることができるのは、いったいいつの日になるだろ
うか。
- 152 また、故郷の庭園にはいつになったら行くことができるだろう

か。

153 今、都のことを思い出し、あらためて官途についてからの自分の半生を振り返ってみると、

154 寸陰を惜しんで学問に専念し、儒者としての道を日々、修養したものだつた。

155 そのおかげで、弓矢で的まきの中心を貫くように、対策にも及第し、国政を行うにも、料理のとき小鱼を煮るのにそうするように、いたずらに効果をあせつて施策を加え、かきまわすようなことはしなかった。

156 二十六歳で対策に及第して進士しんしとなり、

157 その後、讃岐の国守となつて任地に下り、多くの街や村を治めた。

158 こうして私は、父祖以来の学問を受け継ぎ、儒家の人々の間にそびえ立つこととなり、

159 讃岐の国守としての功績は、式部省の役人もよく調べて知っているところだ。

【平仄】

141 ●○○○●●
142 ○●●○○○
143 ●●○○○○
144 ○○○●○○
145 ○○○●●●
146 ●●●○○○
147 ○●○○○○

148 ●○○○○○

149 ○○○○○○

150 ●●●○○○

151 ○○○○○○

152 ●○○○○○

153 ●○○○○○

154 ○○○○○○

155 ●●●○○○

156 ○○○○○○

157 ○○○○○○

158 ○○○○○○

159 ●○○○○○

160 ○○○○○○

【余説】

第三十六段の第141句から第144句は、前段を受け、孤独のとてつもなくつらいことを、足の悪い牝羊めつじと瘡かさができ、手なえとなつた雀に喩える。

第三十七段の第145句から第148句は、孤独を周囲の山水の景色で癒やそうと自然に親しみを覚え、しかし心はやはり都へ帰りたいう思いに狂おしいほどにいつぱいになり、第三十八段の第149句から第152句は、故郷である都のなつかしい風景に思いを馳せることとなる。

第三十九段の第153句から第156句、第四十段の第157句から第160句は、都のことを思い出していると、あらためて官途についてからの半生が振り返られることとなり、やはり自分は祖業を受け継いだ儒家で

(二四不同の違反)

(四字目の孤平の禁) ↓挟み平

(二四不同の違反) ↓挟み平

あるとの思いを強くしたことを詠む。祖業は「儒林」で、人々の間にそびえ立っていて、しかも讃岐国守としての功績も十分であるはずなのに、今のこのみじめな大宰府での生活は何故なのか、道真の煩悶はさらに続くこととなる。

【付記】 本稿は、『菅家後集』注解稿（一）（『北陸古典研究』第十五号、二〇〇〇年十月）、『菅家後集』注解稿（二）（『北陸古典研究』第十六号、二〇〇一年十月）、『菅家後集』注解稿（三）（『北陸古典研究』第十七号、二〇〇二年十月）、『菅家後集』注解稿（四）（『北陸古典研究』第十八号、二〇〇三年十月）、『菅家後集』注解稿（五）（『金沢学院大学紀要 文学・美術編』第二号、二〇〇四年三月）、『菅家後集』注解稿（六）（『金沢大学国語国文』第二十九号、二〇〇四年三月）、『菅家後集』注解稿（七）（『北陸古典研究』第十九号、二〇〇四年十月）、『菅家後集』注解稿（八）（『金沢学院大学紀要 文学・美術編』第三号、二〇〇五年三月）、『菅家後集』注解稿（九）（『金沢大学国語国文』第三〇号、二〇〇五年三月）、『菅家後集』注解稿（十）（『北陸古典研究』第二十号、二〇〇五年十月）、『菅家後集』注解稿（十一）（『金沢学院大学紀要 文学・美術編』第四号、二〇〇六年三月）、『菅家後集』注解稿（十二）（『金沢大学国語国文』第三一号、二〇〇六年三月）、『菅家後集』注解稿（十三）（『北陸古典研究』第二十一号、二〇〇六年十月）、『菅家後集』注解稿（十四）（『金沢学院大学紀要 文学・美術編』第五号、二〇〇七年三月）を次ぐものである。